

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00417

研究課題名（和文）アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルにおける言語感性論の展開

研究課題名（英文）"Sprach&#228;sthetik" by August Wilhelm Schlegel

研究代表者

武田 利勝（Takeda, Toshikatsu）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80367002

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、観念論の哲学と経験的心理学という両極の中間にシュレーゲルの言語感性論を位置付けることによって、そこから生じる言語起源論の新たな意義、そしてロマン派哲学のなかで占めるその重要性を明らかにした。

科学と文学、信と知、自然と自我、国民文学と世界文学といった、近代に入ってあらわとなったさまざまな分裂を自覚し、克服すること。A.W.シュレーゲルの言語感性論は、そもそも翻訳をその前提としていることからわかる通り、対立的なあらゆる両極の媒介を目指すものである。本研究は総じて、その言語感性論が1800年前後のヨーロッパにおける知的ネットワークの重要な交差点であったことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のヨーロッパでは、多言語に秀でたA. W. シュレーゲルの、翻訳者としての業績が高く評価されている。こうした評価の背景には、ドイツ・ロマン派の思想を多文化主義、あるいはコスモポリタニズムに接続させようという、現代ヨーロッパならではの政治的・文化的事情もある。本研究はこうした再評価の機運を背景としつつ、さらに一歩踏み込んで、A. W. シュレーゲル1800年前後のヨーロッパにおける思想的ネットワークの重要な交差点として位置付けた。

研究成果の概要（英文）：By placing Schlegel's theory of linguistic aesthetics between the two poles of idealistic philosophy and empirical psychology, this study clarifies the new significance of the theory of the origin of language and its importance in Romantic philosophy.

To be aware of and overcome the various divisions that have emerged in modern times, such as science and literature, belief and knowledge, nature and the ego, and national literature and world literature. A.W. Schlegel's theory of linguistic aesthetics, as can be seen from the fact that it is premised on translation in the first place, aims to mediate between all opposing poles. Overall, this study shows that the theory of linguistic aesthetics was an important crossroads in the intellectual network in Europe around 1800.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ・ロマン主義 ドイツ観念論 シュレーゲル兄弟 言語論 韻律論

1. 研究開始当初の背景

ドイツ・ロマン派研究において、ながく脇役の立場に甘んじてきたアウグスト・ヴィルヘルム(以下、A.W.)・シュレーゲル(1767 - 1845 年)であるが、近年のヨーロッパでは、多言語に秀でた彼の翻訳者としての業績が高く評価されるようになった。こうした評価の背景には、ドイツ・ロマン派の思想を多文化主義、あるいはコスモポリタニズムに接続させようという、現代ヨーロッパならではの政治的・文化的事情もある。

本研究はこうした再評価の機運を背景としつつ、さらに一步踏み込んで、A.W. シュレーゲル1800 年前後のヨーロッパにおける思想的ネットワークの重要な交差点として位置付ける試みとして出発した。その際、彼の展開した言語論がカギとなる予定であった。

2. 研究の目的

従来の研究において、ドイツ・ロマン派の言語論は以下の二つの傾向に類別されてきた。

(1) 「宇宙的ポエジー Universalpoesie」の理念にもとづく言語詩学

フリードリヒ・シュレーゲルに代表される前衛的なロマン派詩学において、言語は思考の伝達のための道具ではなく、それ自体として創造性・産出性を有する自律的なメディアである。こうした創造・産出(ポイエーシス)の契機ゆえに、いかなる言語もほんらい詩(ポエジー)なのであって、そのようなものとして、言語は無限の自己創造(オートポイエーシス)のうちなる宇宙を己のうちに映し出す。ロマン派の言語論に対するアプローチの多くは、このような、「宇宙的ポエジー」としての言語芸術(「ロマン的ポエジー」)を理念的枠組みとし、ロマン派における言語の自律性の理論的再構築を目指すものであった。多くの場合、ヤーコブソンやトドロフの構造主義的・記号論的言語学がその参照軸とされる。

(2) 「宇宙的文法学 Universalgrammatik」の理念にもとづく言語哲学

シュレーゲル兄弟後期のサンスクリット研究や、W. フンボルトの比較言語学に代表される通り、1800 年前後は実証主義的な近代的言語学の揺籃期である。個別的な諸言語の分析と比較とに向かう彼らの指導的理念として、A.W. シュレーゲルのいう「宇宙的文法学」があった。人類の言語全体は「一にして全」なる普遍であり、そのなかに多様な特殊が有機的に関連しつつ現象する、というのが彼らに共通する根本的な思想である。この根本原理に基づいて、インド祖語を根とした言語系統樹が生まれた。実証的手続きと観念的思弁が混交するこうした言語論は、現代では「言語哲学」の総称のもとに特徴づけられる。

「詩学的」および「哲学的」と称しうるロマン派言語論の上記二つの傾向は、従来の研究において、交じり合うことがなかった。その最大の理由としては、(1)が主要領域とするのはロマン派初期の思想圏であるのに対し、(2)では後期が対象となる、という事情があげられよう。依然として初期ロマン派と後期ロマン派との架橋が困難であるように、ロマン派言語論の二つの傾向は、まったく異なる両極をなしている。

それに対して本研究は、その立ち位置を詩学的言語論と哲学的言語論との中間に定め、この中間領域を分析することを目的とした。その際、鍵となるのは「Sprachästhetik」(Fr. カインツ)の概念である。従来それは「言語美学」と理解され、上記の両極のうちもっぱら詩学的言語論の方に結び付けられてきた。しかし Ästhetik は本来(近代においてこの枠組みを採用したバウムガルテンもそうであったように)狭義の芸術学・美の理論というよりもむしろ、感性に関する学(感性論)であった。知的認識の枠組みに収まらない人間の経験全般、すなわち感覚や知覚をめぐる思考が、A.W. シュレーゲルの言語理論を支えている。その意味において、彼の言語論は「言語感性論」としての言語美学であった。そこでは、言語の知的・悟性的な伝達機能のみならず、音声・音韻・リズムといった感性的側面が強調される。そこにはまた、言語以前の感覚的なものがいかにして言語=認識へと変換されるのかという、系統発生=個体発生としての言語起源への問いも含まれている。

1800 年前後の思想状況では回収されえなかったその多くの着想に然るべき関連性を与え、ロマン派研究に新たな枠組みをもたらすためには、A.W. シュレーゲルの言語諸理論を上記(1)「宇宙的ポエジー」の理念にもとづく言語詩学、および(2)「宇宙的文法学」の理念にもとづく言語哲学との中間を漂う「言語感性論」として再評価することが必要である。

3. 研究の方法

2021 年度から 23 年度にかけて、以下の方法により研究を進めた。

2021 年度

A.W. シュレーゲルが 1790 年代後半に展開した言語論ならびに、1800 年前後に行った二つの『芸術学』講義を中心に研究を進める一方、同時期の Fr. シュレーゲルがその小説『ルツィンデ』においていかなる言語的戦略を企てたかを研究した。後者については、本来は本研究の主軸ではなかったが、1790 年代に兄弟間で交わされた書簡を読み込むに従って、両者のあいだの言語観

の関係を問うことは不可欠であるように思われたからである。これらの研究はそれぞれ論文「フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』における両義性の詩学」ならびに共著『ノモスとしての言語』として発表した。その間、『ルツィンデ』の全訳に従事したが、これは関連するシュレーゲルの論文3篇の訳と併せ、長文の解説とともに出版した。

2022 年度

Fr.シュレーゲルの生誕250年にあたるため、彼の思想について複数の学会で発表・報告する機会があり、そのため当該年度の研究は主としてFr.シュレーゲルに関するものとなった。4月には九州大学独文学会にて研究発表を行い、『ルツィンデ』がA.W.シュレーゲルの言語感性論と同様、フィヒテ的観念論とスピノザの実在論という二極が愛を通じて結びつく瞬間を表現したものであることを明らかにした。また、10月に参加した日本独文学会シンポジウムでは、『ルツィンデ』に見られるような観念論と実在論とのパラドックスが、ロマン派美学においては文学テクストの絵画的表象を通じて、一種のアナモルフォーシス(二重絵画)として現れることを明らかにした。アナモルフォーシスの概念がドイツ・ロマン派の美学研究に導入されたのはおそらく初めてであるが、これによって、従来指摘されてきたロマン派芸術のアラベスク的傾向と、それに対する古典主義的・一点透視図法的傾向とのパラドクシカルな相互依存関係が説明可能となった。同月に社会思想史学会で行われたセッション(招待)では、アナモルフォーシスによって導入されるアラベスクの美学がいかにして近代社会批判に結びつくか、そしてそれがきたるべき社会の新たな理念となりうるかにつちえ、初期ロマン派の共和制論をもとに考察した。

2023 年度

早稲田ドイツ語ドイツ文学会において研究発表を行い、初期ロマン派の詩学的構想が、観念論と身体論(実在論)の中間に自らを定位しつつ展開されていることを論じた。その一方、A.W.シュレーゲルの言語起源論を根本において構成する、人間的自然の言語創生器官ともいふべき「暗い感覚」がカール・フィリップ・モーリッツの経験的心理学に基づくことを確認し、モーリッツのいう「暗い知覚」がその書簡文体論とどうかかわっているかを分析した。この研究は日本シェリング協会シンポジウムにおいて発表された。

8月から9月にかけてベルリン州立図書館で研究調査を行った。主な研究対象はFr.シュレーゲルの遺稿断章集の自筆草稿で、本調査を通じて、シュレーゲルが彼の小説『ルツィンデ』出版後もなお本作の全面的書き換えを計画していたことが明らかとなった。その目的と意義については目下引き続き調査中であるが、その構想全体がA.W.シュレーゲルとの思想的交流を通じて育まれた韻律的思考と不可分であることは確かだと言える。

4. 研究成果

A.W.シュレーゲルにおける言語感性論の出発点にあったのは、彼自身によるシェイクスピア翻訳プロジェクト(1794以降)である。その翻訳作業の目指すところは、原典の意味内容のみならず、原語のもつ韻律的なリズム・響きを訳語においても蘇らせることであり、そのようなものとして空前絶後の試みであった。クロップシュトゥックが打ち立てようとした韻律の規範的法則性を批判しつつ、シュレーゲルは、それぞれの言語における必然的・自然的なリズムの法則性を探求する。各言語独自のリズムを相互に翻訳しようというこの試みは、A.W.シュレーゲルにおいて、リズムの起源への問いへと展開する。そしてこの問いはそのまま、独自の言語起源論を生み出すにいたる。

A.W.シュレーゲルの言語起源論は、単にヘルダーやルソーのその変形的模倣として扱われるだけであった。だがその断片的な諸言説をまったく別の思想的布置のもとで吟味すれば、それは根源言語の恣意性と自然性という伝統的対立軸の調停に向けた重要な試みであったことが明らかになる。この新たな布置として本研究は、フィヒテ、そしてK. Ph.モーリッツによる言語起源論に着目した。

『全知識学の基礎』(1794)によって自我の観念論を立ち上げたフィヒテは、その思想を言語起源論の領域でも展開している。それは記号の恣意性を支持する立場であり、自我は言語を通して世界の多様性を統一性へともたらす、とされる。

それに対してモーリッツは、「経験的心理学」の立場から、人間の意識の奥底にある「暗い知覚」に言語の起源を見出す。この「暗い知覚」はしかし「自然」とも通底するものであり、その限りにおいて言語記号は自然性のうちにその根源を有する。

が統一性・同一性を志向する意識のもとに言語能力を総括するのに対し、において言語は、多様性へと意識を解き放つ自然的なものである。本研究は、A.W.シュレーゲルの言語感性論をこの両者の調停の試みであったことを明らかにした。すなわち彼において言語は、意識的統一と自然的多様との中間領域を動的に漂うメディアである。意識と自然の二極分裂が、同時に言語の発生なのである。そしてこの二極間において、感覚的・感性的なものが鍵となる。

18世紀末の思想的傾向を特徴づける観念論的哲学と経験的心理学を両極とし、その中間にシュレーゲルの言語感性論を位置付けることによって、そこから生じる言語起源論の新たな意義、そしてロマン派哲学のなかで占めるその重要性が明らかとなった。

啓蒙主義とロマン主義、科学と文学、信と知、自然と意識、必然性と偶然性、国民文学と世界

文学 1800年前後の思想は、このような対立、つまり「分裂＝危機（Krisis）」の自覚と克服を本質とする。そうしたなか、A.W.シュレーゲルの言語感性論は、そもそも翻訳をその前提としていることからわかる通り、異質にして対立的なあらゆる両極の媒介を目指すものである。本研究は総じて、その言語感性論が1800年前後のヨーロッパにおける知的ネットワークの重要な交差点であったことを示しえた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 30
2. 論文標題 【書評】小田部胤久『美学』（東京大学出版会、2020年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 110-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32297/schellingjahrbuch.30.0_110	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 119
2. 論文標題 フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』における両義性の詩学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 69-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4772795	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 33
2. 論文標題 書評「福元圭太著『賦霊の自然哲学-フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西日本ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 43
2. 論文標題 書評「畑一成著『ゲート：ポイエーシスの自然学の想像力』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モルフォロギア	6. 最初と最後の頁 158-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 ラムドーアとフィヒテのあいだ 『ルツィンデ』におけるシュレーゲルの レフレクシオン
3. 学会等名 九州大学独文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 ロマン派の約束
3. 学会等名 第3回「第三の国」科研研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 社会思想史学会
3. 学会等名 ドイツ・ロマン主義の起点と思想構造そして現代的意味
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 「聖なるもの」に向けて フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』と絵画的伝統
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 フリードリヒ・シュレーゲル / 武田利勝（訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 幻戯書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 ルツインデ 他三篇	

1. 著者名 武田利勝（共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 ノモスとしての言語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------